
アグレッシブな引き籠り

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アグレッシブな引き籠り

【Nコード】

N2073L

【作者名】

桐龍朱音

【あらすじ】

幼なじみで売れっ子俳優である男曰く、あたしは『アグレッシブな引き籠り』または『働くニート』らしい。――
「めんどくさい」というそれだけの理由で外の世界を厭い引き籠りになった女。外の世界で華々しく生きながらも何故か引き籠りの女のもとへ通う男。そんな二人を中心に女の家の中という極めて小さな世界で繰り広げられる、ほんのり恋愛風味(?)の物語。

悪趣味なゲーム

目の前に立っていた女が膝から崩れ落ちる。
絶望した時なんかにはやるお決まりのポーズだ。
少々大げさではあるけれど。

『どういふことなの、ジュンッ!!』

崩れ落ちた女——西園寺蝶子さいおんじちようこは私の隣に立つ男に向かって叫ぶ。
いつもは嫌味なくらい自信満々な表情を浮かべている綺麗な顔が、
今は悲痛そうに歪んでいる。
泣いているせいで完璧な化粧はドロドロに落ちて、普段からは考え
られないほど醜い顔になっていた。

『どうしたもこうしたも、最初から俺はお前のことなんて何とも思
ってなかったぜ？』

『なに、それ…？』

『ハッ、頭悪い女だなー。つまり最初からお前を嵌めるために近づ
いたってことだよっ！』

『そ、そんなッ！！』

見開いた茶色い瞳に映っているのは絶望。

今、彼女の目の前に広がっている世界はまさに地獄だろう。

私にしてみれば愉快な世界であるけれども。

『だって、だってあなた言ったじゃないッ！！私のこと本当に好き
だから、だからホストもやめて一生私だけのために生きてくれるっ
て！！そのためにまずは真っ当な仕事をしたいから、応援してくれ
って！！だから私、あなたに全財産渡したのよ！？あなたが自分で
会社をおこしたいって言ったから！！』

『ほんと、おもしろいくらい騙されてくれたよなーアンタ。いつも

吹き出しそうになるのを堪えるの大変だったんだぜ？』

ククッ、と心底可笑しそうに笑うホスト——ジュン。
彼の笑いに合わせて私も薄く笑う。

その笑いに蝶子への蔑みをたぷりと込めて。

『…ッ！！ちよつと、アンタ誰よッ！！何でジュンと一緒にいるのよ！！！』

最初からずつとここにいましたけど？とか思ったけど、きっと彼女にはジュン以外見えていなかったのだろう。

それにしても絶望的な状況であるにも関わらず、よくもまあここまですぐ強気でいられることだ。

昔と変わらぬ勝気さに腹が立つ。

『久しぶりね、西園寺蝶子さん』

『久しぶり……？アンタなんて私知らないわよ！』

蝶子の言葉にドス黒い怒りが胸にこみ上げる。

私のことを知らないだと？

私は一日だってアンタのこと忘れたことないのに。

『ふん。すっかり忘れちゃったのね。私はしっかり憶えてるのになー、蝶子様のこと』

『その呼び方……！』

『思い出してくれたかしら？』

私は少し離れたところに崩れ落ちている蝶子のもとへ近づき、彼女の髪を鷲掴みにして顔を思いっきり上に向けさせる。

そしてウェーブのかかった茶色い髪の間からのぞく耳に唇を近付け、囁く。

『私はね昔アンタ達のグループに散々いじめられた、水瀬千紘よ』

『!?!?』

髪を離し、彼女から一步後ろに下がる。
私の足元に崩れ落ちる、画面蒼白の女。
嘗て私を散々苦しめたヤツらの内の一人。

『ぶざまな姿ねー蝶子様? いい気味だわ』

『ア、アンタがあのか紘...?』

『そうよ。アンタたちにブタと呼ばれて蔑まれてたデブのか紘よ』

『嘘よ...! だってアイツはもっとデブでブスで...!』

『アンタたちに復讐するために色々努力したのよ。驚いた？』

『…ッ！』

『やっとあの時の復習ができるわ』

涙でドロドロの蝶子の顔をハイヒールを履いた足で蹴りつけ、予想外の衝撃に頬を抑えながら倒れた蝶子に向かって、最高に意地の悪い笑みを浮かべて吐き捨てる。

嘗てこの女が私にしたように、容赦なんてしない。

『醜いブタは地面に這いつくばって残飯でも漁ってなッ！！』

昔、自分が私に言い捨てた暴言だと気がついたのだろう。

蝶子の目が驚愕に見開かれた。

私はそれを見てもう一度笑みを浮かべてから、踵を返しジュンのもとへと戻った。

そして二人で歩きだす。
背後の蝶子になんて見向きもしないで。

『女は恐いね〜』

暫く歩いたところでジュンが茶化すように呟いた。
私は彼のその言葉に微笑みを浮かべ答える。

『そうよ、女は恐いの。ジュンも女を甘く見てるといつか痛い目を見るわよ』

『ククッ…気をつける』

『まあ、なにはともあれ今回は助かったわ。協力してくれてありがとね』

『ヒロは復讐を果たしたし、俺は楽しめたしよかったな』

『ふふ。でもこれでまたしばらくはジュンとはあまり会わないわね。お金ができたらたまには店に顔出すけど』

『いつでもお待ちしてますよ?』

『ありがと。それじゃあね』

ジュンから離れ、家を目指し歩き出す。
帰ったらまた新たな復讐プランを立てなくてはならない。
まだまだ復讐は終わっちゃいないのだ。
ターゲットは蝶子一人ではないのだから。

『ヒロ』

背後から声をかけられる。
振り返れば金髪に碧眼の端正な顔をしたホスト、ジュンが少し離れたところに立っていた。

『ヒロの本名は？』

ジュンには本名は教えていなかった。
千紘という名前からとって、ヒロと呼ばせていた。
そうすることに特に意味もなかったけど。

『水瀬千紘』

『ふーん。俺の本名は早瀬純』
はやせじゅん

『あら。ホストってお客に本名を教えるもいいものなの？』

『お前はお客じゃないだろ？』

『それじゃあ、何なのかしら？』

『うーん。何だろうな。とりあえず特別な人？』

『何よそれ。いつも適当なんだから』

『そんなことないけど』

『はいはい。それじゃあ、私ほんとにもう行くわね』

もう一度ジュンに背を向け、私は歩き出す。
夜のネオンが少し眩しく感じた。

『千紘は俺にとって本当の特別なのにな』

小さなホストの眩きは、伝えたい相手に届くことなくネオンに照らされた夜の闇に溶けていった。

としないわ【

?セーブしますか? ?
【当たり前よ／そんなこ

* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *

「【当たり前よ】 っと」

セーブをして今までのストーリーを保存する。
ほどなくして？セーブしました？という文字がテレビ画面に浮かび、
？続けますか？？という文字がそのあとに続く。

私は迷うことなく【当たり前よ】を選択した。

「ねー、チロ」

「何」

「そのゲーム、楽しい？」

「楽しくなきゃやってない」

「何か道徳的にマズイ気がするんだけど」

「人の家に勝手にあがりこんでおきながら、さらにゲームにまでケチをつけるなんてお前はほんと最低な男だな」

「あはは。人として最低な生活送ってるチロに言われたかないよ」

傍らに座る男があまりに煩く話しかけてくるので、ゲームに集中できない。

次のターゲットは大河内姫華。おおこうちひめか

蝶子よりも難易度が上がってるから戦略を立てるのが大変なのだ。だから全神経をゲームに注ぎ込まなければならないというのに、こ

の男ときたらベラベラとこちらの神経を逆なでる事言いやがって。

「てかさ、このゲームってどんなストーリーなの？」

「それ知らないくせにこのゲームのこと貶したわけ？」

「だって、ちょっと見ただけでもこれが健全なゲームじゃないことは明白でしょ」

健全じゃないと言えばそうなのであえて反論はしない。

けどこのゲームの価値は健全だとかそうじゃないとかいう所じゃないのだ。

「これはね『いじめゝブタと蔑まれた女の復讐』って言って、高校時代にクラスの女子全員からいじめられていた女の子が大人になって自分をいじめていた奴ら一人一人に復讐を果たしていくっていうゲーム。復讐を果たす人物は全部で17人。一人一人個性があるから違ったやり方で復讐を果たさないといけないの。相手の行動を

リサーチして弱みを握り、時には弱みを作り、おとしめていかなきゃいけないからけっこう頭使うんだよこのゲーム。だから隣でベラベラと喋られて集中力を奪われるとすごい迷惑なんですけど」

「ふーん。すごい悪趣味なゲームだね。何処が楽しいわけ？」

最後に言った嫌味を見事にスルーした男を軽く睨みつけたが、睨みつけられた当人は無駄に整った綺麗な顔に満面の笑みを浮かべて全く反省を見せない。

いつものことながらムカつく。

「あたし（ゲームの主人公）を下に見て散々いじめてきた奴らを時間にかけて踏みつぶして絶望させるのが面白い」

「うわっ、性格悪ッ！じゃあさ、このゲームの主人公とチロの名前が同じな理由^{わけ}は？」

「自分の名前でやった方が復讐に身が入るし、何よりその復讐を遂げたときの満足感と面白さが増すから」

「あははっ、最高にひんまがった性格してるね！」

何とでも言うがいい。

自分の性格がひんまがつていることぐらいよくわかってる。

「まあ、チロが性格悪いことぐらいよく知ってるけど」

「お前、ほんとうるせー」

「あと、口が悪いこともよく知ってる」

厭味ったらしく付けたされたその言葉通り罵詈雑言を吐いてやろう
かろと開きかけた口は、けたたましい目覚まし時計のベルの音によ
って閉じざるを得なくなった。

「運動の時間だ」

目覚まし時計のベルを止め、『いじめゝブタと蔑まれた女』を再びセーブしてテレビの電源を切り、ゲーム機を片づける。きっちりと元通りに整頓したのを確認してから、私は部屋の隅に置いてあったランニングマシンを部屋の中央に引きずり出す。

「ねー、チロ。テレビ見てもいい？」

「見るなっつってもどうせ見るんだろ」

「よくわかってんじゃない」

生まれてからずっと傍で育ってきた、所謂幼なじみであるこの男のことは嫌というほどよくわかる。非常に不本意で喜ばしくないことだが。

「あ、そう言えばさ」

準備運動のストレッチを入念にしていた私に、不意に男が話しかける。

さっきあたしが消して男が再び点けたテレビ画面には何やら映画の宣伝のようなものが映っていた。

「この映画の主演、俺なんだ。応援してね」

にっこりと満面の笑みを浮かべる男の背後にあるテレビ画面に、同じような笑みを浮かべた男が映る。

世間で「ハニースマイル」とかいう寒い名前で呼ばれている笑顔。いつ見てもあたしには胡散臭い笑顔にしか見えない。

「ああ、それが今日までの仕事だったの？」

もうどれくらい前だったか、ズカズカとうちに上がり込んできたこの男は「しばらく仕事で来れないから」とか言ってそれから本当にしばらく姿を見せなかった。
そして今日、ひょっこりと姿を現したのだ。

「そう。俺がいない間、寂しかった？」

「それ以上バカなこと言っていると東京湾に沈めるぞ」

入念な準備体操が済んだので、ランニングマシンに乗り速度と距離を設定して起動させる。

動き出したランニングマシンに合わせ、足を動かす。

「東京湾に沈める？チロには無理だろ」

「何故そう言い切れる？」

「だってチロってば引き籠りじゃん。この家から出れないでしょ？」

的確な意見だ。

けどあたしをそんな所そこの引き籠りと同じように考えてもらっては困る。

「あたしが外に出なくても、金さえ払えばあたしの代わりに動いてくれる人間はたくさんいる。お前を気絶させた後、そいつらにでも東京湾に沈めさせればいい」

「でもさ、俺ってば一応、俳優なんですよ？それに自分で言うのもなんだけどけっこうな売れっ子なわけですよ。そんな俺が突然姿を消したら世の中が黙っちゃいないでしょ。すぐに犯人がチロだってわかって捕まっちゃうんじゃないの？」

「そんなヘマはしない。綿密な計画のもと、お前を東京湾に沈めて

やる」

「チロが言うとは本当に完全犯罪になりそうだから怖いんだよねー」

口ではそんなことを言いながらヘラヘラと胡散臭い笑みを浮かべる男。

ほんと食えないヤツ。

こんなのと幼なじみだなんていい加減うんざりだ。

「お前、本当に邪魔だ。もう帰れ」

「い・や・だ」

あたしがランニングマシンから動けないのをいいことに、男はこれでもかとふんぞり返ってテレビを見ている。

何様のつもりなんだ。

此処はあたしの部屋だぞ。

「わかった。お前、あたしが運動を終えるまでそこにいろよ？ わざわざあたしの時間を邪魔してくれたお札に、日々鍛錬に鍛錬を重ねてきた回し蹴りを送ってやる」

「えー、それは嫌だな」

「安心しろ。芸能人だということで、顔は避けてやる」

「できれば蹴らない方向でお願いしたいんですけど」

「それは無理だ」

「ほんと、チロは『アグレッシブな引き籠り』だよねー」

こちらを振り返った男はやれやれといった感じで笑う。
その余裕ぶったところにさらにカチンときたので、回し蹴りは最低5回はくらわせてやると心に決めた。

あたし、水瀬千紘^{みなせちひろ}20歳。

性別は一応、女。

周りの人間（といっても二人しかないけど）からは千紘を縮めてチロと呼ばれている。

職業は……まあ、パソコンを使って色々なことをしている。
そんなあたしのことを幼なじみで現在売れっ子俳優である桐谷綾斗きりたにあやと
は『アグレッシブな引き籠り』または『働くニート』と評する。

否定はしない。

悪趣味なゲーム（後書き）

また思いつきで変な物語を書いてしまいました（ー；；）
とにかくヘンテコなものが書きたくて生まれた作品です。
温かい目で見てくださいと嬉しいです…。

分かりにくいかもしれませんが、前半は千紘がやっていたゲームの一部始終です。

ものすごく悪趣味なゲームですが、千紘のお気に入りなのでこの先も度々出てくるかもしれません。（↑どうしてもいいことですが）

最悪最低な男

運動が終わったのでランニングマシンを元の位置に片づけ、宣言した通りふんぞり返ってテレビを見ていた男・綾斗に回し蹴りを繰り出す。

しかしヤツは胡散臭いヘラヘラ笑いを浮かべひいひいとおたしの渾身の回し蹴りをことごとくかわしやがった。

「危ないじゃないか、チロ。女の子がそんなことしちゃいけません」

「うるせーよ、このヘラヘラ野郎め」

「何そのヘラヘラって」

「お前のその胡散臭い笑顔のことだよッ！」

チッ、何で当たんねーんだ？

昔っから何度もコイツをぶちのめそうと色々なことで勝負を仕掛け

てきたけど、忌々しいことに今だ一度も勝ったことがない。
非常にムカつくことにこのヘラヘラ野郎は、顔・知能・運動神経ど
こをとっても異常なほどレベルが高いのだ。
その代わりと言っては何だが、性格は最悪だ。

「胡散臭いって、ひどいなー。この笑顔、世間的にはけっこう評判
いいのに」

「それは世間の人間がお前の本性を知らないからだ」

この男のヘラヘラ笑いは実に不思議なことに世間では「ハニースマ
イル」という寒い名で呼ばれ、絶大な人気を誇っている。
確かにコイツの外見だけ見ていたら人気になるのも分かる。
おばあちゃんがロシア人という所謂クウォーターである綾斗の顔は
カッコイイというよりも綺麗という言葉が似合う、繊細な作りをし
ている。

金茶色の切れ長ながらも大きな瞳、通った鼻筋、ちょっと薄めだけ
ど形のいい唇、綺麗な弧を描く眉……それら完璧なパーツがこれま
た形・大きさ共に調度いい顔に理想的に配置されているのだ。

瞳と同じ色の首筋辺りまで伸ばした髪はふわふわと天然の緩いパー
マがかかっていて、その触り心地はかなり良い。

適度な筋肉がつきながらも細身な体は180超えという長身。

つまり、生まれてからずっと傍で見飽きるほど見てきた幼なじみであるあたしの目から見ても外見だけなら文句無しの極上の男なのだ。だから、世間の人々がコイツに王子様のような理想を抱き、夢中になるのも理解できないわけではない。

ただどあたしは声を大にして言いたい。

夢中になるあまりこの男に近づきすぎるな、と。
遠くから眺めてるだけにしなさい、と。

でないと理想は打ち砕かれ痛い目に遭うよ、と。

「俺の本性ってどんなの？」

「白々しい。そんなの自分がよくわかってんだろ？」

「えー、わかんない☆」

「キモい。近づくな」

回し蹴りは一向に綾斗に当たらない。

何だか不毛な事をしてる気分になってきたので、ものすごく口惜しいが回し蹴りを綾斗にくらわせることを諦め、パソコンに向かう。幸いなことにあたしは切り替えが早い方だ。

ムカつく綾斗のことは忘れ、仕事モードに切り替える。

「ねー、チロ」

「∴」

「ねえってば」

「∴」

「ちーひーろーちゃん」

「∴」

「可愛い可愛いちひろちゃん」

「…」

「マイスイートハニー・ちひろちゃ——」

「いい加減、黙りやがれクソ野郎がッ！！！」

パソコン用の椅子に敷いていたクッションを引っ掴み、クソ野郎・綾斗に思いつきり投げつけてやったがまたあのヘラヘラ笑顔でかわされた。

マジで腹立つわーこの男。

「あはは、やっと返事してくれたー」

「あたしは今ね仕事してんの。わかる？し・ご・と！」

「見ればわかるよ、そんなの」

「じゃあ話しかけんな」

「無理。暇で死にそう」

「心配するな。暇で死んだ人間なんて人類史上今だかつていないから」

「じゃあ俺がその最初になるかも。『愛しの幼なじみに放置され暇で死んだ男』として人類史に名を刻んじやうよ」

「何とも不名誉な名の刻み方だな。アホ丸出しだ」

「そんな冷たいこと言わないでさー、俺のことかまって？」

いつの間にやら近くにやってきた綾斗は背後からあたしを抱きしめ、低くも甘いその声でねだるように再度「かまって」と囁く。

そんな甘えた行為はあたし以外の女だったら確実に陥落させることができただろう。

あたし以外ならば、だ。

「お前ほんとうっぜえよ。離れろ」

何度も言うが、あたしは生まれたときからこの男と共に育ってきた。どんなに綺麗な顔してようが、無駄に色気ムンムンだろうが、今更この男に陥落するはずがない。長年傍に居続けたせいで耐性ってものができているのだ。

「相変わらず冷たいなーチロは。俺、寂しすぎて泣いちゃうよ?」

「泣けば?どうぞご勝手に」

「うわあ、マジひでえ。傷ついた」

そんなことを言いながらも綾斗はヘラヘラ笑っている。傷ついているようには到底見えない。

それもそのはず、綾斗だってあたしには自分の魅力が効かないことくらい分っている。

なのにわざわざこんなことするなんて、アホの極みとしか言いようがない。

——ん？ちょっと待てよ…

よくよく考えてみると、さっきからあたし綾斗のくだらない話にまんまと乗っかって無意味な会話しちゃってるじゃん！
仕事モードに切り替えたはずなのに！！

「…そんなに暇で暇で寂しいなら、お取り巻き連中のどこにでも行ったら？」

かまいたくないと思いつつも結果的にかまっている現実には嫌気がさし、打開策を打ち出してみる。
とにかく仕事を続けるためにもこのかまってちゃんモードの綾斗を追い出したい。

「最近のお気に入り……名前何だったっけ……えーと……あっ！
そうそう！モデルの結華ちゃん、じゃなかったっけ？その子のところ
行けば？」

幼稚園く芸能界と綾斗の周りにはいつもお取り巻きの女の子たちが
いる。

おもしろいことに取り巻き連中には美人でスタイルがよく、尚且つ
勝気で性格があまりよろしくない子たちばかりが集まる。

幼稚園く高校まで綾斗と同じところだったので、各年代のお取り巻
き連中にあたしはよく絡まれた。

彼女達曰く、「幼なじみだからって綾斗に近づくんじゃないわよ。
調子乗り過ぎ」だそうだ。

幼なじみってことは今更変えようがないし、近づくって言われて
も近づいてきてるのはむしろ綾斗の方だったし、調子に乗るなって
どころ辺が調子に乗っていたのか逆に聞きたいくらいだった。

理不尽かつバカバカしい彼女達の言い分にあたしが黙っていられる
はずもなく、倍にして言い返して最後には泣かせてやった。

やられたら倍返しにしてやり返す。

それがあたしのモットーだったからだ。

まあ、そんなわけでお取り巻き連中に負けることはなかったのだけ
ど正直相手をするのがものすごくめんどくさかった。

あたしが引き籠りになった理由の一つに彼女達との麗しくない思い
出があるのは明白だ。

「結華？」

「そう。最近のお気に入りはその子じゃなかったっけ？」

芸能界に入っても綾斗の周りには相変わらずお取り巻き連中がいる。綾斗が芸能界に入る頃あたしは引き籠り生活に突入したので、芸能界のお取り巻き連中を実際に見たことはないが、綾斗からの話を聞く限り錚錚たる面子であることは間違いない。

フレッシュな新人から壮年のベテランまで、綾斗のお取り巻きは幅が広く皆売れっ子だ。

今をときめくモデルだろうがプライドの高い女優だろうが、女という女は皆綾斗に惚れこんでしまう。

まさにハーレム状態だ。

芸能界という美形ぞろいの華々しい世界の中でも綾斗は別格であるらしい。

あたしにとっては今だ解せない謎だけでも。

「あー、結華ね。いたね、そんな子も」

「いたねって……お気に入りにじゃなかったの？」

「んー、確かにこの前まではそれなりに気に入ってたけど、もう終わったよ。飽きちゃったからね」

「お前ってヤツは…」

綾斗はものすごい気分屋だ。

そしてかなりの自己中。

そのひどさたるや、「世界は自分中心に回ってるとでも思ってるんじゃないのコイツ？」と疑いたくなるほどだ。

「サバサバしてるから割り切って付き合ってくれる子だと思ってたのにさ、この間会ったら『体だけの関係はもうイヤ。私、綾斗の心が欲しいの』とか言い始めるんだよ？マジ萎えたわー、アレは。それにそろそろ飽きてきたなーこの女って思ってたところだったから、さようならしたってわけ」

「相変わらず最低な男だな」

甘い微笑みに物語の中の王子様のように完璧なルックス。
そのルックスに似合った柔らかな仕草と優しい言葉。
綾斗に接した人は皆、理想を抱き夢中になるだろう。
素敵な人だな、と。

しかしその綾斗はあくまで遠くから眺めた、または適度な距離で見た彼の姿にすぎない。
ようはすべて本性を隠すためのまやかしのだ。

「最低？どうして？」

取り巻きの女の子と肉体関係を結ぶのは、性欲を満たしたいから。
心が欲しいと言った女の子をふるのは、その子に縛られたくないから。

特定の彼女を作らないのは、自分が飽きやすいと自覚しているから。

「俺は自分に正直なだけだよ？」

恐ろしく自分に正直かつべタ甘な、暴君。
それが綾斗の本性なのだ。

説教

そもそも、綾斗がこのような最悪最低な暴君になってしまったのは本人の気質以外にも理由がある。

あたしはそれを知っている。

知っているからこそ、正してやらなければならないと思う。

「お前、いつまで綾音さんのこと引きずるつもなんだ？」

あたしが言った「綾音」という名前に、ぴくりと綾斗が反応する。さっきまで浮かべていたヘラヘラ笑いは消え、表情の無くなった能面のような顔。

なまじ顔が整ってるため表情がなくなるとものすごく不気味だ。綺麗すぎて奇妙な恐ろしさがある。

「……あの人は、関係ないよ。俺は俺のしたいようにしてるだけ」

「お前自分が今どんな顔してんのかわかってんの？ そんな顔で関係ないって言われても無理があるね」

綾音さんというのは綾斗の母親。

今でも最高の女優としてその名を馳せている美人な人だ。

でも、母親としては最低な人。

本当にどうしようもないくらいに。

「いつも言ってるだろ？ 綾音さんがお前にしてきたことを他の人にまでやるなって。昔、綾音さんにやられたことを思い出してしろ。その時、悲しかっただろ？ 辛かっただろ？ 苦しかっただろ？ お前が今、お取り巻き連中の女たちにしてることは綾音さんがお前にしてきた仕打ちと同じことなんだぞ。そんなんで過去の憂さ晴らしをするな。もっと人の気持ちを考えろ。自分がされて嫌なことは人にもするな」

「……」

ああ、一体何度この説教を綾斗にしてきただろう。

もう数え切れないくらいだ。

なのに、コイツは今だにその暴君的態度を改めない。

時には怒鳴りつけるように荒々しく。

時には諭すように穏やかに。

手を変え品を変え、様々やり方で説教してきたけれど、一度だって改めたことはない。

それだけ綾音さんとの過去のトラウマが根深いものなのだとはわかっているけど。

それを乗り越えなければ、コイツは人として本当にダメになる。

……もうけっこう手遅れな気もするけど。

「これも何度も言ってるけどさ、そのままだと本当に好きな人ができたときに困るのはお前なんだぞ？」

綾斗は、綾音さんとの過去のせいで人を上手く愛することができないのだと思う。

だからこそ自分至上主義の暴君的態度をとってしまう。
だけど、それでは本当に好きな人ができた時どうしようもなくなる。
きつと相手を傷つけ、果ては自分まで傷つけることになる。
そしてトラウマはより深くなるだろう。
そうなってはダメなのだ。

「……俺の好きな人はチロだよ」

そう言って、綾斗はしゃがみこみ椅子に座るあたしの膝に顔を埋める。

まるで懺悔する罪人のような姿。

さしずめあたしは聖母マリア様ってどこか？

自分で思ったことだけど薄ら寒くなる。

あたしはどう足掻いても聖母ってガラじゃない。

「チロさえ、チロさえ傍にいてくれれば他はどうだっていいんだ」

こうやって説教する度に、綾斗はあたしのことを好きだと言ってくれるけど。

それはずっと傍にいるせいで培ってきた幼なじみへの家族愛のようなもの。

長年かけて刷り込まれてきた愛着のようなものだ。

綾斗に必要なのはそんな幼なじみとしての愛着ではない。

綾斗自身が自分自身を変えようと思うくらい心惹かれる恋情を伴った「好きな人」だ。

もしもあたしが綾斗にとってそれに当てはまるとするならば、あたしの説教を聴いて暴君的態度を改めるはずだ。

そうじゃないのだから、やっぱりあたしは綾斗にとっての「好きな人」ではないのだと思う。

「ねえ、チロ。チロはずっと傍にいてくれるよね？あの人みたいに俺を捨てないよね？」

あたし自身、綾斗のことをどう思ってるのかと聞かれれば幼なじみとは思っていないと答えるだろう。

けど、「好きな人」ではなくても「大切な人」ではある。

どんなに最悪最低な暴君でも。

どんなにヘラヘラとして胡散臭くてムカついても。

生まれたときから一緒に育ってきたコイツはあたしの家族のようなものだ。

見捨てることなんてできない。」

「捨てたってお前ならどんな手を使っても戻ってくるくせに」

「……何で捨てること前提で考えんの」

「だって、お前たまに捨てたくなるくらいうぜえーからさ」

「……チロって容赦ないよね」

あたしの膝に埋もれたままの綾斗の表情はよく見えない。
ふわふわな金茶色の髪に手を伸ばし、ゆっくりと撫でる。
うん、コイツの髪の毛はほんと撫で心地がいい。

「なあ、アヤ」

そつと綾斗の愛称を呼ぶとゆっくりと綾斗が顔を上げる。

さっきと同じ無表情なのに、泣いているように見えるのは気のせいだろうか。

「あたしはお前を捨てたりしない。飼い主は最後までペットの面倒を見なきゃいけないからな」

「…俺はペットじゃないよ、チロ」

「お前なんかペットで充分だ」

「ひでえ」

「好きな人」を見つけるその時まで。

あたしはこのヘラヘラと笑うどうしようもない幼なじみの面倒をみよう。

コイツが真っ当な人間になるよう説教しながら。

説教（後書き）

だいぶ更新が遅くなってしまっただけにすいません…；
そして何故だかちょっとシリアスになってしまいました。
綾斗の過去は追々明かしていきたいと思います。

お気に入り登録をしてくださってる方、感想をくださった方、本当にありがとうございます。

次回更新は早めにできるように頑張ります…！
次はシリアスではなく明るい感じになると思います。

感想・評価などもよろしくお願いします！
できればお手柔らかに…

猪な美女

「……おい、いつまでそうしてる気だ？」

綾斗にいつもの説教をしてからおおよそ1時間。

あたしの膝に顔を埋めている綾斗はいまだ動く気配を見せない。

最初は説教したことで嫌な過去のことか思い出させてしまったし、少しくらいなら甘えさせてやるかと思って、そこらへんにある本を手に取り読んで暇を潰していたのだがいくらなんでも長すぎる。いい加減邪魔くさくなってきた。

「一生」

「お断りだ。さっさとどけ」

「やだ」

がっちりとあたしの足に手を回し、もはやしがみつくような態勢をとって駄々をこねる綾斗の姿に怒りよりも呆れを感じる。

お前は幾つだ？

20歳だよな？

20歳は立派な大人だぞ。

駄々をこねて微笑ましく思えるのは子供だけだ。

「どけ」

人間、甘やかしてばかりではダメになる。

重要なのは『飴と鞭』の使い分け。

てか、自分で自分をべったべったに甘やかしてる綾斗には『飴』なんて与える必要はなかった。

コイツに与えてやるのは『鞭』だけで充分だ。

『飴』は本当に必要な時だけ与えてやればいいのである。

「…いますぐどかないと渾身こんしんの拳骨げんこつをそのオメデタイ頭にぶちかましてやる」

「わーお。チロの渾身の拳骨なんて頭が抉えぐれそうだね」

「はい、ぶちこみまーす！」

そうして握り締めた拳を勢いよく振りかぶったところで、あたしの部屋のドアがものすごい勢いで開かれた。
開かれたっていうより、これはもう撃破されたと言ってもいいレベルだと思う。

「チロ！！！！ここにクソ綾斗いるでしょっ！？」

バーン！という効果音をバックに部屋に飛び込んできたのは、これ

またバーン！という効果音が必要なほど完璧なプロポーションを持った妖艶な美女。

あたしの唯一と言ってもいい友達である、朝比奈美咲あさひなみさきであった。

「……ミサ、ドアは静かに開けろっていつも言ってるだろ？」

美咲は綾斗にも負けないくらいの美形だ。

腰まで伸びた赤茶色の髪はクセひとつないサラサラの直毛だし、鳶色の瞳は人形のように大きい。

プロポーションは出るところは出て引っこむべきところは引っこんでいるという、まさにボンツ！キュツ！ボンツ！という表現がピッタリな素晴らしいものだ。

彼女を表現するなら「誰もが思い描く美女を具現化したような女」と言えるくらいの紛うことなき美女である。

しかし、天から二物も三物も与えられたような彼女にもやはり欠点はある。

それはそれは残念な欠点だ。

「ああっ！チロ！！今日もなんて愛らしいのっ！！」

「ミサ、それ会う度に聞いているけどあたしは可愛くなんてない」

「何言ってるのっ！？チロの可愛さは毎日愛^めでも足りないくらい
のものよっ！！ああゝ何でこんなに可愛いのかしらっ！？」

そう言うってミサは拳を振りかぶった状態のままのあたしの元へ駆け寄る（いや、これは突進というべきか）と、思いつきあたしのことを抱きしめた。

その結果、あたしの顔はその見事な巨乳に埋もれることとなった。

「——っ！！——ッ！！！」

「あー癒されるうゝ！！ほんとチロはちっこくていい匂いがして可愛かったらありやしないわねっ！！」

「ッ！！ッ！！」

ぎゅっ、と抱きしめられたあたしはまさに窒息死寸前。

思春期の男どもなら文字通り天国へ逝けるようなウハウハな素敵シチュエーションだが、生憎あたしは女であり、こんな状況で死にたいなどとは微塵も思えない。

どうにかして抜け出そうと試みるのだが、可憐な見た目に反して力が強いミサの腕からなかなか抜け出せない。その間にも酸素は刻々と遮断されていく。

「うーんもう食べちゃいたいくらいだわっ！！！」

何でこんなにもがいてんのに気が付かないわけ！？

あたし死にそうなんですけどッ！！

ちょ、巨乳による圧死なんて死に方はほんと勘弁してほしい！！

「美咲、離れろ。チロを殺す気か？」

ああ、そろそろお花畑見えるかも…なんて思ってたら急に巨乳地獄から引き離された。

ぷはっと口を開けて即座に酸素を吸い込む。

ああ、呼吸ができるってこんなに幸せなことだったんだね！！
生きてるって素晴らしいよほんと。

「大丈夫か、チロ？」

いつの間にか膝にしがみ付いていた綾斗があたしの背後に回り、椅子に座るあたしのことを抱きしめていて邪魔くさかったけど、今は気にしないことにした。

助けてくれたのはどうやらコイツのようだし、それに何より今は呼吸を整えることで忙しいからかまってる暇はない。
だから力なく頷くことで何とか大丈夫だと伝える。

「出たな、クソ綾斗!!! 私とチロの仲を引き裂く悪魔めっ!!!」

あたしから引き離された美咲がびしっとその細く綺麗な指をあたしの背後にいる綾斗に突きつける。

大きな鳶色の瞳を爛々と光らせるその姿はなかなかに苛烈だ。

漂う覇気は百戦錬磨の武将のように猛々しい。

「うるせーぞクソ美咲。お前のその無駄にでかい胸のせいで俺のかわいいチロが死ぬとこだったんだぞ」

「チロは私のものよ!!! 勘違いすんなこのヤリマン男!!! その汚らわしい手を今すぐチロから離しなさい!!! てか、半径3km以内に近づくな!!!」

「お前こそ勘違いしてんなよ、乳デカ女。お前のその厭らしい胸がチロの清らかさを汚してるってことにいい加減気がつけ。お前なんてチロの視界に入るな。消えてしまえ」

「何ですってー!？」

ここまでくれば分かるだろうが、美咲の欠点は可憐なその見た目に反して猪のように気性が荒く自分がこうだと思ったことに一直線に突っ走るといふ、猪突猛进な性格である。

とにかく一直線に自分が思ったことに突き進むその姿は勇ましすぎて引くものがある。

そんな美咲と綾斗は初めて出会った小学生の頃から何故か仲が悪い。いわゆる犬猿の仲というヤツだ。

「二人とも煩い。あたしは綾斗のものでもミサのものでもない。あたしはあたしのものだ」

二人の罵り合いがいい加減うざったくなってきたのでそう言って仲裁に入ると、二人は一応罵り合いは止めたものの、視線は互いに憎憎しげにぶつかり合っている。

「チロは絶対俺のもの」「チロは私のなんだから」とか言う言葉が

まだ聞こえてくるようだが、無視無視。
これ以上は付き合ってられん。

「そんでお前はいつまであたしを抱きしめてるつもりなんだ？ いい加減離せ」

「やだ」

抱きしめるというよりは、もはやのしかかるようにしてあたしに纏わり付く綾斗はちよつとやそつとの力じや引き剥がせそうにない。いつもなら暴れまくって何としてでも離れるてやるのだが、今日はミサの巨乳に圧死させられかかったこともあって力が出ない。何よりめんどくさいので、そのまま綾斗を纏わり付かせた状態に甘んじることにする。

そのうち飽きて離れてくれるだろう。

「チロに抱きつくなんて忌々しい…ッ！！その汚らしい腕の中に可愛いチロがいなければ瞬殺してやるのに！！」

キリキリと唇を噛み締め綾斗を睨み付けるミサの表情はかなりの迫力がある。

しかしさすがは美人と名高いミサ。

怒っていてもその姿はやっぱり綺麗だ。

「それで、ミサは綾斗を探しに来たの？」

「え？ ああ、そうよ。すっごく不本意なんだけど、次の仕事の打ち合わせをコイツとしなきゃなんないのよ。ちゃんと連絡しておいたのに、放り出しやがってこのクソヤローが…！」

ミサは20歳という若さながら、メイクやスタイリングといった美容方面でカリスマと名を轟かせている売れっ子の美容師である。

様々な芸能人との仕事をちょこちょこなしつつ、現在は主に綾斗の専属という形で仕事をしているようだ。

犬猿の仲なのに一緒に仕事をするとは不思議でならないのだが、ミサ曰く「ビジネスとプライベートはきっちり分ける」とのことら

しい。

ハキハキとした猪女らしい答えた。

「アヤ、今日は休みだからここへ来たんじゃないのか？」

「そうだよ？」

「ぎっけんなこのヤロー！！！！バリバリ私との打ち合わせがあるっつーの！！！！一週間も前から決まっていただろうがあああ！！！！」

どんどんとミサが凶暴化していく。

さっき本人も言っていたが、きつとあたしが綾斗に抱きしめられていなければ殴りかかっていたのだらうと思う。

だって握り締めた拳がぶるぶると震えてるもの。

もしかして綾斗はそれを見越してあたしを抱きしめているのか？
だとしたらほんとコイツは抜け目がないな。

「アヤ、仕事はちゃんとしろ」

「あはっ！引き籠もりなチロがそんなこと言うなんてね」

「引き籠もりだけどあたしはあたしなりにちゃんと仕事をしている。だから現在進行形で仕事を放り出してるお前に説教することはできる」

「そーいやそうだね。チロはただの引き籠もりじゃなくて働く引き籠もりだもんね」

のらりくらりとした受け答えでうやむやにしようという魂胆だろうがそうはいかない。

あたしがコイツに与えるのは『鞭』。

さっき決めたように『飴』は本当に必要な時にしか与えない。

「仕事しろ、アヤ」

身を振り、綾斗の目を真っ直ぐに見て真剣に言う。

ゆらりと一瞬瞳を泳がせたものの、すぐに綾斗はにやりと笑った。
悪戯を思いついたようなその笑みに、嫌な予感がする。

「わかったよ。チロが言うなら仕事する」

「最初っからそうしろっの！！！」

「うるさい美咲。そのベラベラと汚い言葉を並べ立てる口をいい加減閉じろ」

「な〜ん〜だ〜と〜おおおおお!?」

「ミサ、落ち着け。頼むから」

それ以上怒ったらどこかの血管が破裂してしまうんじゃないかとヒヤヒヤする。

視線だけで人を殺せるなら、間違いなく綾斗はすでに死んでいるだろう。

怒らせるようなことを言う綾斗が悪いのだが、ここはとにかく落ち着いてもらわないと。

「チロ…！そ、そんな可愛い顔でお願いしてくるなんて卑怯よ…っ
！！」

そう言いながらミサは顔を手で覆い悶え始めた。
一体、何なんだ。
訳が分からないけど、怒りとは違うものでまた落ち着きを失ったミ
サが心配になる。

「ねえ、チロ」

ミサの方を向いていたあたしの顔を、優しくけれどしっかりとした
力で自分の方へと向け直させた綾斗はさっきと同じ悪戯っ子のよう
な笑みを浮かべていた。

ああ、嫌だ。

きつとめんどくさいことを言い出すに違いない。

「俺が仕事してる間、一緒にいて？」

「嫌だ」

間髪入れずそう答えてやったが、綾斗の笑みは崩れない。

むしろどんどんとその笑みは深まっていく。

誰もが見惚れると言われているその笑みに、あたしは見惚れるどころか寒気を感じる。

「打ち合わせだけだから、ここでもできるし。そうだろ、美咲？」

「……まあね」

「外に出なくていいんだから、いいでしょチロ？」

「あたしにはあたしの予定ってもんがある」

「じゃあ、仕事しない」

「アヤ！」

「ねえ、お願いチロ」

縫るように潤む、金茶色の瞳。
昔からあたしはこの瞳に弱い。
どうしようもなく非力で助けられなかったあの頃の、傷ついた綾斗
があたしに向けていた瞳とかぶってしまいうから。

「チロも一緒にいてくれるなら私も嬉しいわっ！！こんなクソヤロ
ーと二人で打ち合わせだなんてほんと反吐が出そうなくらい嫌なん
だもの」

「それはこっちの台詞だクソ女」

「んだとコラあああ！！！！」

またもや勃発する美咲VS綾斗の口論。

綾斗の縫る瞳に疼く自分の心を救うためにも、そして二人の喧嘩を止めるためにも、あたしはこう言うしかなかった。

「……わかった！あたしも打ち合わせの場所に同席するから、ふたりとも落ち着けて！」

その言葉に犬猿の仲のはずの二人が浮かべた笑顔がよく似ていると思ったのはあたしの気のせいだろうか……？

猪な美女（後書き）

毎度のことながら更新が遅くてすいません；

今回は新キャラ・ミサが登場です。

彼女は基本、さっぱりとした可憐な美女なのですが、猪モードに切り替わると言葉もガラも悪くなります（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073/>

アグレッシブな引き籠り

2011年4月21日19時22分発行